

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381066

研究課題名(和文) 植民地期朝鮮における不就学者の学びと教育支援活動に関する研究 「夜学」を中心に

研究課題名(英文) A Study on Learning and Educational Support Activities of Out-of-School Children in Colonial Korea - Focused on "Night School"

研究代表者

李 正連 (LEE, Jeongyun)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・准教授

研究者番号：60447810

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、植民地期朝鮮における「夜学」という教育実践をいわゆる「抑圧 抵抗」という二項対立で捉えがちであった問題を乗り越えるため、当時の夜学を経験した人々からオーラル・ヒストリーを聞き出し、夜学の実態をより多面的に考察した。それにより、当時の不就学者の学びにおける夜学の役割や意義のみならず、当時の社会及び生活状況や朝鮮民衆の対日認識等についても明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This study heard the oral history from people who experienced the night school in colonial Korea. Through that, the dichotomous research viewpoint on "Night School" at that time was overcome, and the realities of night school were examined more diversely. As a result, it was possible to clarify not only the role and meaning of night school in the learning of the out of school children, but also the social and living situation and the recognition of the Korean people against Japan and so on at the time.

研究分野：教育学

キーワード：夜学 私設講習所 不就学者 オーラル・ヒストリー 植民地期朝鮮 社会教育

1. 研究開始当初の背景

植民地期朝鮮における学校教育は、朝鮮民衆の教育欲求やニーズを充足させることができなかった。三・一独立運動後から普通学校への就学希望者が急増し、入学競争率が高まっていくが、朝鮮総督府は学校増設に消極的であった。このような朝鮮総督府の消極的な対応に私立学校への統制も加わって、朝鮮には学校教育を受けることのできない児童が多く生まれ、朝鮮民衆による学校増設要求運動も展開されるようになった。一方、当時経済的困難のために学校に行けない子どもや途中で退学してしまう子どもも数多く、また男尊女卑思想等によって娘は学校に行かせない親も少なくなかった。

しかし、朝鮮民衆の教育熱は収まることなく、ますます高まるが、学校増設はなかなか進まなかった。それゆえ、不就学児童のみならず、学齢期を超えた青年や農民、労働者等の一般民衆に教育を提供する夜学や講習所、塾などが大幅に増え、朝鮮民衆の教育熱を解消していったのである。これらの教育施設や活動は朝鮮総督府によって行われるものもあったが、その多くは朝鮮民衆の手によって行われた。

報告者は、これまで韓国における近代社会教育の起源を追究しつつ、その社会教育が植民地期に入ってからどのような展開を見せてきたかについても研究してきている。その一つの展開として、朝鮮民衆による代表的な社会教育的活動といえる「夜学」活動について考察し、拙著『韓国社会教育の起源と展開—大韓帝国末期から植民地時代までを中心に—』(2008)の第4章「朝鮮民衆による社会教育実践—「夜学」を中心に—」においてまとめている。

しかし、報告者の研究を含むこれまでの大半の先行研究は、当時の新聞や雑誌等の文献資料のみに基づいた初歩的な考察にとどまっており、当時の実状を詳細に、とくに生徒たちの立場からの「夜学」に対する思いや通学動機・目的、通学効果や満足度などに関する実証的な考察までには至っていない。すなわち、当時「夜学」に通っていた人々が実際どのような動機や目的で「夜学」に通うようになり、どのような教材を使って、具体的に何をどのような方法で学んだのか、「夜学」での学びによってどのような変化や効果が得られたか、そして教師はどのような人々であったのか等についてのより詳細な考察は、「夜学」の全体像を描くためには必要不可欠な部分である。さらに進んで、従来の多くの研究において「夜学」は民族教育を行ったところであったといわれてきたが、実際はどうであったのか、また「夜学」に通っていた人々及びその家族(主に親)や周りの人々は「夜学」のみならず、当時の教育現実についてどのような印象や思いを持っていたのか等の当時の実状は、文献資料だけで

はリアルに描き出すことができない。

そこで、本研究では、植民地期朝鮮において「夜学」に代表される不就学者のための教育活動を経験したことのある人々(以下、「夜学経験者」という)へのインタビュー調査を通して、彼・彼女らのオーラル・ヒストリーから植民地朝鮮における不就学者の学びとその支援活動の実態調査に取り組んだのである。

2. 研究の目的

本研究は、植民地期朝鮮における「夜学」経験者へのインタビュー調査(オーラルヒストリー)を通して、文献資料を中心としたこれまでの研究手法では明らかにできなかった植民地朝鮮における不就学者のための教育または朝鮮民衆による自主的な教育活動の実状とその特徴を究明し、植民地期朝鮮の教育をより多角的に描くものである。

以上の研究目的を達成するための本研究の具体的な研究課題は次の通りである。

(1) 植民地期(1910~1945年)の朝鮮における「夜学」をはじめとする、正規の学校教育以外の教育活動や実践について概観し、当時の不就学者の学び及びその教育支援状況について考察する。実際、植民地朝鮮では経済的困難や教育に対する無理解、そして学校増設に消極的だった朝鮮総督府の教育政策方針等の理由により、多くの子どもが学校教育を受けることができなかった。しかし、朝鮮には不就学児童及び学齢期を超えた青年たちのための多様な形態の「夜学」や講習所、簡易学校等が存在しており、官民それぞれによって行われていたのである。

(2) 学校教育を受けられなかった人々への教育を担っていた代表的な活動としては「夜学」があげられるが、これまで「夜学」に関する研究は文献資料のみを考察したものが大半であり、その実態を明らかにするには限界があった。そこで、本研究では、植民地時代に「夜学」を経験した人々へのインタビュー調査、つまりオーラル・ヒストリーを通して、文献資料だけでは把握しきれなかった「夜学」の設立・設置に至るまでの経緯や設立者、教師等をはじめ、教育内容及び方法、教材、そして「夜学」に対する経験者たちの思いや感想、その効果(進学、就職、民族意識の昂揚など)、その他のエピソードなどを聞き出すことによって、当時の「夜学」の実態をより詳細に解明していく。

(3) 植民地朝鮮の「夜学」に関する従来の研究では、「夜学」は主として日本による「抑圧」に「抵抗」するための朝鮮民衆による「民族教育の産室」として捉えられてきた。その代表的な研究としては、盧崇澤『日帝下民衆教育運動史』(1980)が挙げられる。し

かし、当時の「夜学」の中には民族教育を行っていた「夜学」も確かに存在していたものの、「夜学」で教えられた教育内容をみると、国語（＝日本語）や算数等だけを教えていたところが多く、必ずしも民族教育が行われたと断定することのできない「夜学」が存在する。したがって、本研究では、植民地期の「夜学」に通っていた当時の生徒たちの証言（オーラル・ヒストリー）を通して、従来民族教育や抗日運動の教育施設としてのみ捉えられがちであった「夜学」に対する研究視点に疑義を呈し、当時の「夜学」への朝鮮民衆の期待や通学動機、満足度等を明らかにすることによって、「夜学」に代表される朝鮮民衆による教育活動に関する研究に新たな視点を提示する。

3. 研究の方法

研究方法は、文献資料の発掘と精読、植民地期「夜学」経験者へのインタビュー調査（オーラル・ヒストリー）で大きく2つの方法で行った。

1つは、従来の先行研究であまり扱われて来なかった資料、例えば、植民地時代関連の諸資料館や記念館（文学館）、各地域の文化院などの資料と、インタビュー調査時にインタビュー個人が所有する各種資料（当時の写真や歌なども含む）などを新たに発掘し、考察することで、これまで主に当時の新聞（主に『東亜日報』）や雑誌のみに頼っていた「夜学」研究により実証性を加えることができた。

2つは、植民地期の不就学者が多く教育を受けていた、いわゆる「夜学」教育の経験者を多数発掘し、インタビュー調査を行った。当時の不就学者の学びとその支援状況を夜学経験者の語りからこれまでの文献研究では見えてこなかったことを実証的に考察することができた。それにより、これまで主として民族教育機関として捉えられてきた従来の「夜学」研究に新たな研究視点を提示することができた。

4. 研究成果

本研究は、植民地期朝鮮の夜学経験者（教師や生徒）のオーラル・ヒストリーをもとに、夜学の実態を明らかにすることで、夜学研究における実証性の不足を埋めるとともに、当時の夜学に対する「抑圧-抵抗」の二項対立的視点の問題を克服するものである。3年間の研究を通して得た成果は以下の通りです。

（1）平成26年度は、まず植民地期朝鮮の学校教育政策を踏まえながら、不就学児童の状況について検討した。そして、当時の夜学に関する実証的な考察のため、当時の夜学経験者を発掘し、インタビュー調査を行った。初年度は比較的大規模で行われていた講習所に注目し、従来の文献資料中心の研究手法

では明らかにできなかった植民地期朝鮮における不就学者の学びの実態、そして朝鮮民衆による自主的な教育活動の実状とその特徴を明らかにした。とくに、今回のインタビュー調査で発掘した全羅南道宝城郡の「養正院」と済州島の「明月塾」で学んだ経験を持つ10名のライフ・ヒストリーをもとに、当時の講習所の実態を考察した。

私設講習所は学校へのアクセスの不便さや経済的理由から学校に行けない不就学児童の多い村に当該地域の有志等が設立する場合が多く、運営体制は初等学校にほぼ近い形を取っていた。しかし、講習所は不就学児童の教育を担う役割のみならず、正規学校への入学競争の激化によって生まれる受験失敗者たちの受け皿としての機能も果たしていた。また、講習所の設立・運営者が厳しい官からの統制を巧妙に避けながら、進めようとした民族教育等がそのまま子どもたちに浸透したとも言い難く、むしろ子どもたちは各自の必要から講習所に通っていたといえる。

（2）平成27年度は、前年度に引き続き夜学経験者へのインタビュー調査を行いながら、その中でも女性の夜学経験者に注目して、当時の女性たちにとって「夜学」はどのようなものだったかを探った。女性に注目する理由は、第一に、植民地期朝鮮における不就学者の多くが女性であり、その女性たちの教育を主に担ったのが夜学だったからである。第二に、夜学は生徒の性比における女性の割合が学校のそれより比較的高いからであり、最後に、女性の場合、夜学に通った理由の一つとして家事や育児労働からの逃避や友達との遊び等が挙げられるなど、必ずしも教育や学習欲求とは直接関係のない理由も多く見られることから、従来の研究において主として「教育の場」としてしかとらえられてこなかった「夜学」の新たな一面が見られるからである。

夜学を経験した女性のオーラル・ヒストリーから見えてきた特徴は以下の通りである。

1930年代以降、女性の教育への参加率が大幅に向上するが、とりわけ夜学における女子比率は公立普通学校や書堂よりも高く、女子教育において夜学の占める比重は非常に大きかった。当時夜学に通う男性は学校への就学・進学試験もしくは就職等を準備するといった明確な目的意識がある人、もしくは経済的困窮による不就学者が大半であったが、女性の場合は、女だからという理由で、家が富裕層でも学校には就学させてもらえず、家事労働や子守などを強いられる人も多かった。つまり、教育機関そのものが子どもたちにとって「遊び場」としての一面を有するといえるものの、夜学においてはその男女差が大きく表れる。結婚や「供出」が女性の教育機会を阻害する一要因でもあったといえることができる。今回の調査対象の多くは1940年代前半に夜学を経験しているが、こ

の時期も女性が教育を受けることに対して否定的な認識を持つ親や祖父母が依然として多くて、経済的余裕があっても就学させてもらえず、夜学に通うのも反対される場合が少なくなかった。その理由の一つには、女性が文字を習うと品行方正な女性になれないという考えや、いずれ嫁に行く女の子に教育は不要だという慣習がまだ根強く残存していたからである。さらに、当時日本の紡績工場等で働く若い未婚女性を募集することがあったが、そこに連れて行かれたら絶対戻って来れないという噂が各地に広がり、多くの家庭では娘の結婚を急ぎ、人によっては結婚のために夜学を断念した例もあった。

(3)平成28年度は、夜学教師に注目し、当時の夜学教師の時代認識や教育哲学、教育内容等から植民地期夜学の特質を考察した。従来の研究では夜学教師に関してはあまり研究されておらず、その実態が明らかにされていない。夜学教師の多くは地方有志や青年であったといわれているが、実際彼らがなぜ夜学で教えるようになったのか、また夜学の教育で何を重視していたのか、そのためにどのような工夫をしていたのか、生徒たちとの関係はどうだったのかなどの具体的な活動や教育観について検討した研究は管見の限り皆無である。そこで、平成28年度は主に植民地期夜学教師を経験した人あるいはその生徒だった人たちの語りから当時の夜学教師について考察し、その実態と特質を探った。

植民地期朝鮮における夜学の全貌を明らかにするのに本研究で調査した夜学経験者のライフ・ヒストリーだけではもちろん十分ではない。しかし、夜学経験者の大半が現在非常に高齢であり、当時の関連資料も極めて少ないため、今後新たな経験者を発掘することは決して用意ではない。その中で、植民地期朝鮮における夜学経験者へのインタビュー調査を試みて、当時の実状を少しでも描き出せたのは、本研究の大きな成果といえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

李正連「植民地期朝鮮における私設学術講習所と不就学者の学び～『養正院』及び『明月塾』出身者のオーラル・ヒストリーをもとに～」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第54号、2015年3月、pp.151-159、査読無。

李正連「植民地期朝鮮の夜学と女性の学び～夜学経験者のオーラルストーリーをもとに～」アジア教育学会『アジア教育』第10号、2016年9月、pp.15-30、査読有。

李正連「『社会教育』の始発点を探る～旧韓末と植民地時代を中心に～」京畿道平生教育振興院『The more』Vol.19、2016年12月、

pp.50-53、査読無。

〔学会発表〕(計 1件)

李正連「植民地期朝鮮の夜学と女性の学び～夜学経験者のオーラルストーリーをもとに～」アジア教育学会、有明教育芸術短期大学、2015年10月24日。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

李 正連 (LEE Jeongyun)

東京大学大学院・教育学研究科・准教授
研究者番号：60447810

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()